

企業風土として 障害者雇用は当たり前のこと

—三洋電機株式会社
ソフトエナジーカンパニー徳島工場—

職場
ポータル

EMPLOYMENT REPORT



外観検査をする河野昌代さん（聴覚障害）

（文）清原れい子
（写真）小山博孝



三洋電機株式会社ソフトエナジーカンパニー
徳島工場

〒771-0213 徳島県板野郡松茂町豊久 139-32
TEL 088-699-9001 FAX 088-699-5711
本社 兵庫県洲本市上内膳 222-1

充電式電池の生産は 日本一

徳島空港のすぐ近く、飛行機の離着陸が間近に見える松茂工業団地の一角に、「三洋電機株式会社ソフトエナジーカンパニー」の徳島工場がある。主に充電式電池をつくっていると聞いて、小さな製品だからきつとこじんまりとした建物、と勝手にイメージしていたら、広大な敷地に大きな工場群が四つ。電池生産は、大規模な自動化ラインが必要な「装置産業」なのだそう。

三洋電機株式会社は、五つの「カンパニー」に分かれている。デジタルカメラ、携帯電話、液晶プロジェクターなどIT関連の「マルチメディア」、掃除機、洗濯機など家庭電化製品の「ホーム・アプライアンス」、業務用冷凍冷蔵庫などの「産機システム」、ICなど半導体の



穴見彰一管理課長

「セミコンダクター」と、モバイルエナジー商品のリチウムイオン電池、ニッケル水素電池、カドニカ電池、リチウムポリマー電池、リチウム電池などの「ソフトエナジー」だ。

ソフトエナジーカンパニーの本社は、淡路島の洲本市にある。淡路島は、三洋電機の創業者井植歳男さんの故郷で、「ぜひ工場を」という地元の声にこたえて、一九六四年に工場をつくり、ちょうど開発されていたカドニカ電池の生産を始めた。当時はまだ橋がなく、交通の便がよくなかったため、「小さな製品」が必須条件だった。その後、リチウム電池の生産を開始。八八年には徳島工場が操業を始めた。

ソフトエナジーカンパニーは、ITブームに乗り、ノート型パソコン、携帯電話の伸びに合わせて急成長してきた。工場は、洲本、徳島、鎮岩（加西市）の三つ。従業員は三、三〇〇名。年間生産個数は約十億個で、充電式電池の生産量では日本一だ。

徳島工場はA、B、C、Dと四つの建物が並んでいる。最初はA工場のみ一六名でスタートしたが、B工場ができた九二年には二六〇名、C工場ができた九五年には四六〇名、D工場が完成した九八年には九五〇名と従業員は急増し、主に



リチウムイオン電池



ニッケル水素電池

充電式のニッケル水素電池、リチウムイオン電池と、電動工具用のカドニカ電池の一部を生産している。操業して十四年。従業員の平均年齢は二九歳。交替勤務のため、九割近くが男性となっている。

地元施設とのつながりから 知的障害者を雇用

三洋電機は、障害者雇用に先駆的に取り組んだ企業として知られている。八二年に兵庫県、加西市と設立した播磨三洋工業は日本で三番目の第三セクターであり、九三年には鳥取三洋電機が、鳥取県、鳥取市と千代三洋工業を設立している。ソフトエナジーカンパニー徳島工場では

の障害者雇用は、経営企画室徳島管理部管理課が担当する。課長の穴見彰一さんは徳島工場の拡大にもなつて、洲本市の本社から転勤してきた。

「こちらに来て二年半ですが、三洋電機全体に、法定雇用率はクリアしなければいけないという企業風土があります。ここは工程が自動化されている工場ですから、雇用する場所が限られているのがつらいところですが、従業員がふえた九六年から本格的に採用を始めました」

現在は一四名が働いている。上下肢の障害者二名は組立と極板製造で、聴覚障害者八名は、検査業務に六名、管理課と運搬業務に一名ずつ、知的障害者四名は、一名が検査業務、三名が工場内の営繕の仕事についている。三〇代、四〇代の人もいるが、ほとんどが二〇代の人たちだ。

九六、九七、九九、二〇〇〇、〇一年と、障害者の集団面接会やハローワークの紹介、養護学校の推薦などで採用してきたが、知的障害者の雇用は、松茂町の知的障害者施設とつながりができたことがきっかけだった。

徳島工場では、工場設立以来、年末に従業員が家庭から品物を持ち寄り、チャリティーバザーを開いて、その収益金をサンヨーの電化製品に代えて、施設に寄付してきた。

「知的障害者の施設から、『採用していただけませんか』という話が出て、工場の営繕ならできるとはいいかというところからスタートしました」

施設には、通勤寮、グループホームがあり、町中で暮らす人たちの支援態勢もできていた。徳島工場で働く四名は、グループホームと通勤寮から一名ずつ。残りの二名は結婚していて、ひとは県営住宅、ひとは家を借り、食事や金銭管理など日常生活の支援を受けている。

聴覚障害者が現場との「橋渡し」

管理課長の穴見さんの下には、聴覚に障害がある阿部行雄さんがいる。

「聴覚障害者のリーダーとして、現場からの不満や要望を聞いてもらって、改善をしなければならぬところは、私から所属長に『こうしたところを改善してほしい』と伝えていきます。職場とのコミュニケーションをとるために、一時は毎日のように職場巡回をしていましたが、最近は社内のパソコンメールでのやりとりが中心で、巡回は月一回ぐらいになっていると思います」



製造設備の保全業務をする三浦拓也さん、下木克之さん、戎田陽二郎さん（左から・いずれも聴覚障害）

阿部さんは東京の会社で働いた後、故郷の徳島に戻り、ハローワークで求職をして、九七年に入社した。昨年八月、現場から管理課に移動して、パソコンでデータ入力やデータ整理をしながら、ISO14000の事務局を担当している。

「忙しいというより、頭を使わなければなりませんので、たいへんですね。耳が聞こえないので、どうしても情報から離れてしまうことがあります。いままでどおりにやってみようと、それが変わっていったか……、気をつけているつもりなのですが、わからないところもあるのです。むしろ、いいです」

現場の人たちには、聴覚障害者の気持



管理課の阿部行雄さん(聴覚障害)。現場の障害者との橋渡し役として活躍している



外観検査を担当する上西康弘さん(聴覚障害)。全国ろうあ者やり投げ大会で、2位入賞の経験もある

ちを理解できる人が管理課にいることは心強いと思う。

「そう感じてもらえれば、ありがたいですね。いちばん多い相談は、仕事にかかわることです。お互いにどうしたらいいか、こういうふうにやってみようとか話し合いながら解決方法を模索するの、考えることが多いですね。

いろいろな考えを提供するのが大事だと思いますから、私ができる範囲での情報を提供して、各自がその情報をもとに判断して決めてもらうことを念頭においています」

阿部さんは三八歳。かつて聴覚障害者のテニスの全国大会で優勝したことがある。社内にはほかにやり投げの選手もいるし、サッカー、野球で活躍する人など、スポーツ好きな人が多い。

阿部さんはまた、県聴覚障害者福祉協会の青年部長として活動中で、市町村の

手話通訳や手話奉仕員の養成講座の講師も務めている。

「忙しいので、ちょっときついですが、テニスもしたいのですが、なかなか時間がとれません。

いまの仕事は昨年八月に移ったばかりです。将来こういう仕事をしたいという余裕はまだありませんが、この会社ですと働き続けるつもりです」

阿部さんと穴見さんのコミュニケーションは口話が主で、お互いが席を外していたり、忙しいときはメールでやりとりをしている。

穴見さんは、現場との調整で出番があるときは筆談をする。

「私は手話ができませんので、何かあったら筆談で面談をしています。相談事としては、結婚すると夫婦二人では生活がきつい、何とかならないかという話が出ています。そのへんは制度的に見直さなければなりません。景気が好転してくれば、配慮できるのではないかと思います。

賃金体系としては準社員として採用していますが、正社員への道が開けるような仕組みにするのもこれからの一つの課題かもしれません。職場から障害者への不満は、直接聞いたことはありません」

知的障害者を
検査業務に配属

知的障害者が一人、職場実習と職域開発援助事業を経験して、二〇〇一年に入社した。

「二つのことを根気よく続けるのが得意なので、何かできる仕事はないかと言われて、いろいろな仕事をしてもらった



電池の厚み検査をする二宮隆さん（左・聴覚障害）と佐藤俊行さん（右・自閉症）



部品運搬をする渡辺佳明さん（聴覚障害）

結果、電池の検査業務ならできるのではないかと配属しました。自閉症でコミュニケーションがとれないので、最初は所属長から『むずかしい』と言われ、ハローワークの方と養護学校の先生、現場の管理職が何回かミーティングをもちました。せっかく採用したので、定着してほしいと考えました」

最初は聴覚障害者が指導係になり、つきっきりで指導した。近くで仕事をしながら面倒を見た女性社員は、「話しかけても、こちらを見ない。自閉症の人は初めてでしたので、最初は無視されているのかと思いました。誰かが

そばにいないと不安みたいですが、いまは注意をしても平気。やんちゃになって地を出してきましたね」

一年がすぎ、職場に慣れて、自分の「居場所」を見つけられたのだと思う。穴見さんも、自閉症の人と接するのは初めてだった。

「最初は、会話のキャッチボールができないことに驚きました。応用はききませんが、仕事のペースはかなり上がってきていると思います」

検査・運搬・営繕……
それぞれの職場で

穴見さんと阿部さんの案内で工場内を見学した。最初に訪れたのは製造設備の保全業務をしているハワイセル検査工程検査課設備・システム係。電池の充電・放電をするための部品の交換や修理をしているセクションで、三名の聴覚障害者が働く。

「電池の製造は装置産業です。プラス極板とマイナス極板をどうやってつくるか……とか、電池をつくる自動機がノウハウなのです。素人の方にはわかりませんが、プロが見れば、ノウハウはすぐわかります。極板から検査までトータルで新しく装置をつくらせたいへんなお金が

かかります」

管理部門などは月々金の通常勤務だが、現場は四班二交替の一二時間勤務。つまり従業員の四分の一しか出勤していない。自動化された機械は大きく、人は少ない。障害者は現場でも全員が通常勤務体制をとっている。

電池の厚みの検査、電池の外観検査、自動倉庫の部品の出入庫……などの仕事をまわる。

工場の敷地は一八万六、〇〇〇平方メートル。とにかく、広い。営繕の仕事は、晴れた日は工場まわりの美化を、雨が降ったときは工場内の清掃をする。晴天のその日、どこで作業をしているのだろうかと探して行くと、D棟の横で草取りをしていた。

「一生懸命に働くと、弁当がおいしい」

「毎日、忙しい」

「奥さんと一軒家に暮らしています。お弁当は世話人さんがつくってくれます」

「今日はいいいお天気で、ごつつう気持ちがいい」

松茂町は徳島県内で福祉施設が充実している地域だそう。大手企業で働き、結婚して町中で暮らす。その存在は、知的障害者の間できつと「あこがれ」になっているだろう。

従業員を採用するときは 障害者もふやしたい

三洋電機ソフトエナジーカンパニーの二〇〇〇年度の売上高は三、〇〇〇億円だった。

「日本経済の動きと連動していると言いますか、私どもの電池が出始めると景気が戻ったとわかるのですが、電池に関しては底を打ったという感じはしていません。まだまだ伸びる業界だと思います」

同社の障害者雇用率は約一・九%。徳島工場では二・二%を超える。穴見さんは、一般従業員を採用するときには、障害者も同じように採用していきたいと考



渡辺さん（左）に手話で連絡事項を伝える阿部さん（右）



緑化整備など工場内の営繕作業を担当する新宅武司さん、佐野泰治さん、北島哲雄さん（左からいずれも知的障害）

えている。

「いまは状況的に雇用はふやせませんが、要員をふやすときには同じように障害者もふやしたいと思います。聴覚障害者にはパソコンが得意な人もいますので、将来的にはそちらのほうの仕事も職域拡大をしていきたいと思っています」

工場の大きさに、充電式電池の生産量日本一を実感した。

そして、知的障害者が働く職場をつくっていること、管理課に聴覚障害者がいて、現場とのコミュニケーションがとれる体制にしていることに、障害者雇用に先駆的に取り組んできた三洋電機の企業風土を感じた。